

2017年産 主な畑作物の 作付指標	単位:ha	全 道		十 勝	
		17年指標	前年比	17年指標	前年比
	麦類小麦	11万9308	+331	4万2205	-2834
小豆	1万7500	+1000	1万2000	+1460	
豆	大納言	2500	±0	370	+70
	金時	6450	+450	5440	+340
類	手亡	1800	±0	1680	+40
	大豆	3万5670	+3370	9633	+1573
ジャガイモ	生食	3200	+500	290	+40
	加工	1万4904	-2533	6111	-761
ジャガイモ	でんぷん原料用	1万4013	+364	8922	+84
	種子	2万2200	±0	7121	+745
ビート	種	4857	-500	1972	-295
	実践指標	6万0000	±0	—	—
	実践指標	6万0138	±0	2万6343	+318

水準の4万2205ヘクタールとなった。

◆豆類 金時は340増

小豆は、道産使用の拡大を進めた結果、消費量が前年を上回って需要は回復傾向。16年産が作付面積減に加え、収量も少なかったため、「17年産の生産は供給安定化に向けて面積の確保が必要」とした。金時や手亡などのいんげん類は、輸入品からの切り替えを進めるために、安定的な販売、供給体制が必要で一定の面積を確保した。金時は16年産の収量、品質ともに低下し、今後の

の4品種で設定。道産小麦の需要は高まっているが、輪作体系維持の観点から大幅な増減は難しく、前年並みの面積に。十勝は作付意向面積が4万2301ヘクタール、指標面積も同

供給不足の懸念があるため作付面積を増加。金時の指標面積は、十勝で前年比340ヘクタール増となった。大豆は、実需者のニーズに対応した安定供給体制を確立するため、全道で3370ヘクタール増、十勝で1573ヘクタール増に設定した。

◆ジャガイモ 実測6111増

生食・加工用は意向面積で設定した。ただ意向が16年の実測より少なかった十勝では、安定生産体制を維持する観点から実測の6111ヘクタールで設定した。

でんぷん原料用は、道産でんぷんの生産基盤確保に向けて、十勝は前年比1割増、全道合計では前年並みとした。

◆ビート 318増に設定

16年産は台風などの影響で収量、糖分ともに平年を下回る見込み。17年産は、前年実績を基にした実効性の高い「実践指標」を設けて対応する。

作付面積減少に歯止めをかける観点で、全道は前年と同数、十勝は318ヘクタール増で設定した。

農業ガイド1091号

2017年1月28日

道内16年産ビート 収量、糖分に地域差 平均糖分管内最高は土幌

道農政庁が発表した道内の2016年産ビートの生産実績（市町村別）では、天候不順や台風被害の影響で、収量や糖分に地域差が目立った。1ヘクタール当たりの収量は60トン超の町村がある一方、20トン台に落ち込む町もあるなど大きく開いた。平均糖分は土幌町の16.8%で管内で最も高かった。

市町村	作付面積	ha当たりの収量	生産量	平均糖分
帯広	3325ha	58.01ト	19万2896ト	16.5%
音更	3030ha	56.91ト	17万2460ト	16.6%
土幌	2177ha	62.05ト	11万3350ト	16.8%
上土幌	748ha	51.61ト	3万8620ト	16.5%
鹿追	1178ha	51.82ト	6万1071ト	16.2%
新得	202ha	45.73ト	9251ト	16.7%
清水	1284ha	49.19ト	6万1916ト	16.4%
芽室	2835ha	60.73ト	17万2169ト	16.3%
中札内	1122ha	60.18ト	6万7521ト	16.2%
更別	1861ha	54.55ト	10万1518ト	16.2%
更大	538ha	42.17ト	2万2697ト	15.8%
尾山	190ha	33.16ト	6321ト	15.3%
幕別	2233ha	51.24ト	11万4432ト	15.9%
池田	1073ha	27.99ト	3万0044ト	15.7%
豊田	649ha	35.20ト	2万2864ト	15.7%
本別	1367ha	37.38ト	5万1096ト	15.9%
足寄	561ha	28.20ト	1万5836ト	15.7%
陸奥	43ha	33.54ト	1449ト	16.1%
浦幌	1633ha	31.83ト	5万1998ト	16.0%
十勝計	2万6056ha	50.18ト	130万7518ト	16.3%
全道計	5万9389ha	53.69ト	318万8520ト	16.3%

16年産は春先の強風で直播（ちよくはん）の畑など一部で種をまき直した。6月以降の長雨や台風では冠水した畑も多く、大きさはあっても「水ぶくれ」で糖分が高まらない傾向も指摘された。

1ヘクタール当たりの十勝平均の収量は50.18トンで、同16.55トンの大幅減となった。70トン台はなく、最多の芽室町の60.73トンと中札内村の60.18トンが60トンを超えた。一方、池田町（27.99トン）と足寄町（28.2トン）は20トン台の不作となった。30トン台も5町あった。北海道糖業本別製糖所管内の東部地域では廃耕した畑もあり、管内平均を下回った。

作付面積は2万6056ヘクタールで同324ヘクタール増えた。最多は帯広市の3325ヘクタールで、音更町の3030ヘクタールが続いた。栽培戸数は音更町の423戸が最多、1戸当たりの作付面積は広尾町の23.83ヘクタールが最も多かった。

直播の管内の作付面積は6407ヘクタールで、東部の町を中心に高く、最も高いのは本別町の66.4ヘクタールだった。

管内の平均糖分は16.3%で、豊作だった前年より1.3ポイント減。市町村別では土幌町に次いで新得町が16.7%、音更町が16.6%、帯広市と上土幌町が16.5%となるなど、12市町村が16%を超えた。